

秋田の風

日銀秋田支店長コラム

あきた芸術劇場ミルハスが誕生して1年がたった。さまざまみなコンサートやイベントに利用され、県内外から多くの人や文化を呼び込んでいる。能代港、そして秋田港では、洋上風力発電の大規模商業運転が全国で初めて開始してもうすぐ1年になる。最近では観光資源としての活用も検討され始めている。また、地方都市では希少な公立美術大学が誕生して今年で10年になる。卒業生や学生がデザインなどを手がけた空間や商品が県内に少しずつ増えてきている。

日本経済を少し長い目でみると、バブル崩壊後に深刻な調整局面に入り、四半世紀以上がた

変化の兆し

つ。何度か景気浮揚の気配も感じたが、直近のコロナ禍など強いストレスが生じては、その気配が薄れるといったことを繰り返してきた。何よりこの間に、モノの値段は上がらないもの、賃金も上がらないもの、地価に至っては下がるものといったデフレマインドが、企業そして家庭の中にまですっかり浸透した

てきた。中小企業を含む幅広い企業が、エネルギー価格など輸入物価の大幅な上昇をきっかけに商品やサービスの値段を上げ、賃金も上げている。今年の賃上げは約30年ぶりの高水準となった。企業には、人手確保のため収益を高めた上で従業員に

計全体の支出は抑えられてきたが、状況の緩和に伴い、人々は行動を活性化している。コロナ禍で使われず家計にとどまった資金を待機資金と呼び、さまざまな推計がなされているが、いずれにせよ日本では待機資金がまだ相当額あり、当面は消費を下支えすると考えられる。所得から支出への前向きな循環は、経済成長のベースとなる。

好循環を確かな流れに

ことは、日本経済にとって非常に大きな重石となってきた。しかし、足元に明らかに変化の兆しを感じられるようになって

視野にもう一段の値上げを検討するところもある。個人消費は、物価高の影響から節約する部分とお金を使う部分のメリハリが強まっている

環は、経済成長のベースとなる。賃金上昇を伴うかたちでの物価の上昇は、この四半世紀ほとんど確認されなかったが、足元でみられ始めている。日本が成長する国に戻るためには、この変化の兆しを来年以降にしっかりとつなぐ必要がある。今は待機資金の効果から、かつてない追い風も吹いている。難しい企業もあるだろうが、来年以降も多



くの企業で持続的に賃上げが行われ、また、新たなチャレンジや付加価値向上のための投資が行われていくことが期待される。

ミルハスなど、最近の秋田で生じている変化は経済の動きと無関係にもみえる。しかし、デフレマインドが浸透した社会では、せつかくの変化を生かす可能性がある。日本経済は増え始めた賃金や待機資金も使い、われわれ自身が秋田の変化や魅力を積極的に楽しむことから始めたい。また企業には、こうした変化を自社の成長に取り込んでいくことが期待される。秋田で生じている新たな変化が、日本経済の前向きな変化を象徴するものの一つとなれば、誇らしい。

〈随時掲載〉

（片桐大地・日本銀行秋田支店長）